第３部パネル　分科会 51

海外では地域の助け合い活動でどれだけ高齢者の生活を支えているか

（企画・協力：（一財）長寿社会開発センター　国際長寿センター）

提言

高齢者の生活、活躍の場の拡大を！
参加型社会作りは
世界共通の流れです。

登壇者

【進行役】
大上　真一氏　（一財）長寿社会開発センター 国際長寿センター室長
馬　　利中氏　上海大学教授・東アジア研究センター所長
李　　誠國氏　慶北大学校医科大学名誉教授
松岡　洋子氏　東京家政大学人文学部准教授
鎌田　大啓氏　（株）TRAPE代表取締役

■ 寄せられた声から

- 松岡先生のお話がとてもわかりやすかったです。ヨーロッパの制度を学ぶ機会があまりないので、貴重な学びでした。「海外の制度を学ぶ＝日本の制度の弱点を学ぶ」と思いました。鎌田さんのお話、興味深かったです。元気な高齢者をマネジメントするシステムが必要だと思いました。元気なうちから社会資源をつなげる専門家がいないと自ら動ける（社会参加できる）高齢者は限られています。包括支援センターは、余裕がなく無理と思います。

議事要旨　大上 真一氏

分科会51では４つの講演とそれに基づいたディスカッションが行われた。

最初に登壇した松岡洋子氏は先進諸国で広く展開されているパラダイムシフトの内容を報告した。すなわち、高齢者の自立意識の向上とともに高齢者支援は「制度のみで支える」という考え方から「高齢者の自立と地域参加を支援する」へのシフトである。

この考え方をベースとして、オランダでは2013年に国王が福祉国家から自分の生活と周りの環境に責任を持つネットワーク型社会への転換が表明されている。

デンマークでは2015年より、地域ボランティア組織への支援、拠点整備が集中的に行われるとともに、支援が必要になった場合にはまずリハビリテーションを集中的に行うことによって在宅生活を続けることが原則となっている。

オーストラリアにおいても2015年のケア法で高齢者支援にあたっては「してあげるサービス」ではなく、個人の強みと能力に焦点を当てることが徹底されている。これらの動きを背景に、先進各国ではさらに高齢者の自立を促し、ボランティア組織などの地域資源づくりが以前よりまして活発になっている。

次に鎌田大啓氏はイギリスで近年広がっている「リエイブルメント（ふたたびできるようになる）・サービス」の紹介を行った。基本理念は、地域の中でみな役割を持ってよりよく生きるということである。そのために自治体のリエイブルメントチームは孤立などによって虚弱化した高齢者に短期集中リハビリテーションを行い、さらにコミュニティの多彩な活動につないでいくのである。

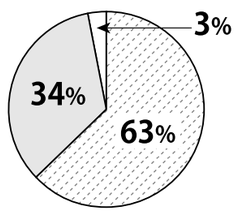
韓国の李誠國氏は、100歳高齢者の調査を通じて健康長寿の秘訣は「毎日何らかの仕事をしている」「正しい生活習慣の自己管理」「人との関係においてポジティブ」であることを見出した。また韓国においてもケアが必要な住民が住んでいたところで一人一人のニーズに合ったサービスを享受し、地域社会との交流の中で生きていくための「地域主導型社会サービス政策」が開始されようとしていることを報告した。

そして中国の馬利中氏は2014年の日中韓賢人会議での共通理解である「アジアは老いている。高齢化の加速につれて、東アジアの人口ボーナスは続々と消えており、これは経済成長に直接マイナスな影響を引き起こす。アジアで主導的役割を果たす中日韓はさらに協力を強化するべきだ」との認識を紹介した。さらに上海市を例に、前期高齢者が80歳以上高齢者を支援（安否、家事、通院等）する仕組みや生涯学習などを紹介した。

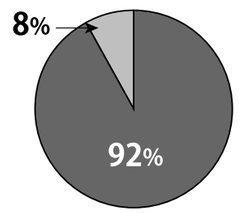
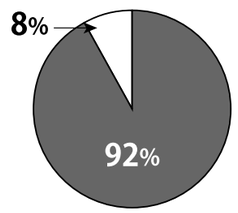
以上から、本分科会においては、世界的に高齢者の地域参加に向かうパラダイムシフトが大きく進んでいることが確認された。そして日本において進んでいる「助け合いを通じて地域を作っていくこと」の重要性は世界各国の共通理解であり最優先事項であることが確認された。

アンケートの結果　参加者概数：50名　回答者数：38名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方